耕平さんかわら版

発行編集部
大塚耕平事務所
☎052-757-1955
Kouhei@oh-Kouhei.org

みなさん、こんにちは。今年は六月から猛暑でしたが、いよいよ夏本番。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介しています。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということです。

最近の夏の暑さは異常です。死にそうな日もあります。「そんな大げさな」と思う人もいるかもしれませんが、熱中症で何人も亡くなります。ご自愛ください。と言って使った「大げさ」も仏教用語。「大袈裟」と書きます。

漢字を見てピンときた方も多いと思います。「袈裟」はお坊さんの衣装のことです。「袈裟」はサンスクリット語で壊色（えじき）や混濁色を表す「カーシャーヤ」の音写。仏教では出家僧侶は財産になるような私有物を持つことを禁じられ、衣服も例外ではありません。そのため、ボロ布や端布を縫い合わせて作った衣服が袈裟の始まりです。色褪せた衣を五列つなげば五條袈裟、七列なら七條袈裟、九つなら九條袈裟と言います。

在家者が白い布をまとっていたのと区別するため、草木や金属の錆を使って染め直され（染壊）、黄土色や青黒色にしました。そのため「カーシャーヤ」と言われたのです。

出家僧は下着、普段着、儀式着の三枚の袈裟と食事や托鉢に使う持鉢のみを持つことを許され「三衣一鉢（さんねいっぱつ）」と称されました。

しかし、仏教が西域、中国、朝鮮、日本と伝わると、時代とともに袈裟は徐々に装飾が施され、金襴の刺繍が入ったり、派手な図柄も見受けられるようになり、「大袈裟」と言われるようになります。

とくに日本において顕著であり、袈裟の色や装飾で僧侶の位階や特権を表すものになり、紫衣（しえ）つまり紫色の袈裟の着用には天皇の勅許が必要となりました。なお、一般の僧の黒い衣は黒衣（こくえ）と言います。

臨済宗の開祖栄西が派手な袈裟を着て町を歩き、説法も尊大であったことから、必要以上に誇張することを「大袈裟」と言うようになったとする説もあります。

必要以上に大きい、実態以上の表現という意味で「大袈裟」が用いられるようになったのは近世以降であり、栄西の話も面白おかしく「大袈裟」に創作された話のようです。

袈裟は特別な場合を除き、右肩を出すようにして掛ける「偏袒右肩（へんだんうけん）」という着方をします。これは如来が両肩を覆って着用している「通肩（つうけん）」に対する着方であり、仏への崇拝と畏敬の念を表しています。インドでは尊敬する人物の前では敵意が無い事を示すために右肩を出す事が通例であったからです。

師匠は弟子の修行が十分に達成されたと判断した時、仏法の核心を伝授し、その証として祖師伝来の袈裟と持鉢を与えます。これを「衣鉢を継ぐ」と表現します。

なお「袈裟を着る」とは言いません。僧侶の世界では衣（ころも）は「着る」ですが、袈裟は「着ける（つける）」と言い分けています。

首から架ける輪袈裟という簡易型の袈裟は、僧侶の他、在家信徒も法要の時などに使用しますね。ではまた来月。

※

尾張名古屋
「歴史街道を行く」
－社寺・城郭・尾張藩幕末史－
中日文化センター 栄・豊田 新 講座
2022年4～9月（６回シリーズ）
お問合せ：栄教室
0120-53-8164
4月17日（日）開講
お問合せ：豊田教室
0120-98-2841
4月24日（日）開講
大塚耕平事務所
かわら版担当：あさい
TEL 052 757 1955